

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02264

研究課題名(和文)十九世紀末の英米廉価版小説が日本近代文学に及ぼした影響

研究課題名(英文) Influences of end of 19th century Western cheap edition stories on Japanese modern literature

研究代表者

堀 啓子 (Hori, Keiko)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：60408052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本の近代文学は、明治以降、欧米文学の影響を色濃く受けてきた。だがとりわけ十九世紀末の英米で出版された無名作家たちによる廉価版小説が、日本の名文士たちに多大な影響を与えてきたことは、あまり知られてはいない。
本研究において報告者は、当時の文士たちがいかにして、数ある廉価版小説から優れた原書を選定し、巧みに構想を抽出して自作にとり入れ、名作を編み出したのか、その翻案過程を検証し、それらの作品が後代の日本文学に与えた影響を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Since the Meiji Era, Japanese literature received many influences from the West. Among these influences, however, little is known that Western cheap editions written by nameless authors and published in the end of the 19th century had a profound impact on famous Japanese writers.
In this research, I examined and analyzed how Japanese writers of this period absorbed literary style and trends from the West and skillfully adapted them to suit the tastes of an emerging modern Japanese society.

研究分野：比較文学

キーワード：尾崎紅葉 黒岩涙香 徳田秋聲 Charlotte M. Brame Bertha M. Clay

1. 研究開始当初の背景

日本の近代文学は、明治以降、欧米文学の影響を色濃く受けてきた。だがとりわけ十九世紀末の英米で出版された無名作家たちによる廉価版小説が、日本の名文士たちに多大な影響を与えてきたことは、あまり知られてはいない。

本研究では、当時の文士たちがいかにして、数ある廉価版小説から優れた原書を選定し、巧みに構想を抽出して自作にとり入れ、名作を編み出したのか、その翻案過程を検証し、それらの作品が後代の日本文学に与えた影響を明らかにしようとする。

2. 研究の目的

アメリカではダイムノベルズ、イギリスではペニードレッドフルという表現をとることもあるのだが、英米で十九世紀末から大々的に売り出され、大流行した一連の小説があった。1 dime (10cents) や 1 penny という廉価で売り出された通俗的な小説の総称である。内容は多岐にわたるが、薄利多売を目的としたため、読者対象は特定の知識層などではなく、ごく一般の人々である。これらの書は、ストーリーテリングの面白さに重点を置き、一時的な娯楽を求める読者には魅力的な存在であった。

こうした廉価版小説が最初に日本にもたらされたのは、明治も初期のことである。洋書とはいえ、安価で語彙は易しく、ストーリーラインも明快である。そのため多くの文士がこぞって入手し、そのなかから構想のヒントや骨組みを得て、自家薬籠中のものとした。そうして発表された中には、名作と謳われた作品がいくつもある。著作権もあまり意識されない時代であったが、原作者の多くが無名であったことも、文士たちが気楽に構想を借りる一因になったのであろう。

報告者の研究目的は、日本にもたらされたこれらの廉価版小説を体系的に整理し、それらの原書から、日本の近代文学が従来になかった構想の原拠をどのように吸収し、作品世界を拡げて後代の作品に影響を与えていったかを明らかにすることにある。

その具体的な研究工程としては、

1. 英米の原作小説が、具体的な数としてどのくらい日本にもたらされ、どのような文士がどの作品を購入し、実見していたかを調査すること。
 2. 個々の文士がそれらを読んでいた時期と時を同じくして発表した作品に、原書との構想の類似や共通のモチーフが認められるか精査すること。
 3. 上記の1、2の調査過程を経て、明らかに廉価版小説の影響が認められた作品のうち、作品構想が、後年の作家に反復的に適用された例を実証すること。
- という三段階の調査が考えられた。

じつは従来、文学正史には残らないこうした無名の原作の検証研究はほとんどなされていなかった。もとより、対象となる原書が多く失われ、調査が極めて困難であるという物理的な限界も一因であった。だが報告者はこの分野を数年にわたって追究し、幸いに明治大正のいくつかの作品がこれらの廉価版小説の翻案であることを推定していた。

そしてそれぞれの比較から、個々の作品の影響関係や同時代の文壇意識、読者の嗜好を整理しえたことは、『日韓近代小説の比較研究』(慎根緯、明治書院 平成十八年)や、『美女とは何か』(張競、角川学芸出版 平成十九年)、『英文学の地下水脈』(小森健太郎、東京創元社 平成二十一年)などで、他分野やアジア各国の研究者諸氏にも言及して戴いている。

こうした研究をふまえ、ここで新たに興味を惹かれたのが、江戸川乱歩の作品構想の重要性への指摘である。彼の名作『白髪鬼』(昭和六年)は、Vendetta!という、廉価版英書をもとにした作品だが、じつは明治時代に黒岩涙香が同じ原作をもとに同名の小説を発表していた。乱歩は敢えて同名タイトルを使うことで涙香への敬意を示した上で、「それにしても何というすばらしい題材であろう。百年に一度、イヤ千年に一度、やっと見つかるか見つからぬ、世にも貴重な材料と云わねばならぬ。私は、この様な材料を掴み得た原作者が羨ましくてならぬのだ。」(『白髪鬼』の執筆について)、『富士』昭和六年三月)と、原作の構想を絶賛する。すなわち「世にも貴重な材料」となる作品構想は、極めて稀少性が高いが、それゆえにこそ作品を際立たせ、名作足り得らせる鍵であると強調したのである。

そう考えると、ストーリーテリングの魅力のみで市場を席卷した英米の廉価版小説が、単なる目新しさにとどまらぬ、強烈な個性と魅力を以て、当時の日本文士を圧倒したのも首肯できる。そして中でも魅惑的な構想は、単に一文士の一作品に取り込まれてその作品を輝かせたにとどまらず、その作品が、さらに後代の作品に実際上の影響を与え、構想が受け継がれ、次なる名作を生み出すという二次的な波及効果をもたらしたことも注目し得る。じっさいそうした例は、先の『白髪鬼』以外にも、同じアメリカの廉価版洋書から構想を得た末松謙澄の『谷間の姫百合』(明治二十一年)と菊池幽芳の『乳姉妹』(明治三十六年)や、他のアジア諸国の文学へと翻案された例にもいくつか認められる。

徳田秋聲は自叙伝的小説『光を追うて』(『徳田秋聲全集』第十八巻 岩波書店 平成十二年)のなかで、明治の半ばに、初対面の師匠が弟子入り志願の青年に、「原書を一冊持って来て、そのうちの数頁を捲(もぎ)取り、この短編の筋だけ取って、成るだけ面白く日本風に翻案して見ないか」といって「勿論アメリカの赤本」を手渡した場面を描いてい

る。文字どおり下敷き感覚の廉価版洋書から構想を借りることは、文士たちにはごくありがちな日常風景だったのであり、彼らはただ、原作の西洋風味をいかに取りのぞき、日本の趣向に直してふさわしい文体をあてがうかに腐心した。

こうして従来、比較文学研究は全般的に、文体の相違や改変箇所注目することが多かった。だが本研究では、作品の本来の眼目たる構想の重みを再確認することで、日本の文士たちが彼らの文学の創成期に、いかにして廉価版洋書から敏感にその魅惑の源を獲得し、国境や時代を縦横に踏み越えうる魅力にあふれた作品を創りあげたのか、構想の具体的な傾向と受容の経緯を明らかにしようとした。

3. 研究の方法

英米の図書館での現地調査

できるだけ多くの廉価版小説を確認するため、それらをまとめた数で所蔵するアメリカの図書館に赴き、原書の確認作業を行った。

学会への参加および研究発表

廉価版小説の研究は英米でもまだ新規の分野であり、専門研究者も限られているため口頭でのみ伝えられる情報も多い。そのため国内外の学会や研究会に参加し、報告者が国内で調査し得た日本側の背景を発信しつつ、他国の研究者との情報交換を密にするように努めた。

報告者が従来の研究で注目してきたのは、主として Charlotte M. Brame という日本でも人気の高かった一人の廉価版小説の作家である。じっさい数百冊に及ぶ彼女の原書を確認すると、そのうちのいくつかの作品には、尾崎紅葉や黒岩涙香、小栗風葉らの個々の作品との直接の影響関係を認められることができた。

本研究ではこの従前の研究の範囲を広げるかたちとなり、原作者を特定せず、輸入されていた廉価版小説と、その入手者である文士を見合わせるべく同時並行的に作業を進めた。

そのため関東圏のみならず国内でも、明治初期から洋書を扱っていた各地の書肆や文学館などに赴き、洋書輸入リストや同時代書籍の関連資料が所蔵されている場合は閲覧させて頂いた。また、地方書店の場合は同時期に同地に滞在し、英語で原書を読む習慣のあった文士の同時代作品を努めてリストアップした。

洋書の廉価版小説という未分化の領域で、研究範囲を広げることによる困難は予想通りであり、なかなか原書を見ることができない場合もあった。原書が廉価版小説であるために英米でも多数出版され、現地でも体系的な出版リストが残されていないためでもある。そのため、報告者は以下ふたつの面から

対策を講じるように努めた。

1. 調査対象とする廉価版小説を限定することで、不用意な研究作業の拡散を避け、混乱を減じるように心掛けた。同時代のこうした原書については、「当時アメリカでは南北戦争後のダイム・ノヴェルの氾濫時代で、そういう廉価本が日本にも輸入されていた。黒岩涙香は若い時分貧乏で、語学の勉強に輸入された廉価本をむやみに読んだ。それらは『シーサイド・ライブラリー』や『ラヴェル・ライブラリー』などで(下略)」(中島河太郎『創作推理小説の誕生』昭和二十八年)や、「森田思軒が取寄せてよんだヴェルヌの英訳は、主としてシーサイド・ライブラリーやラベル・ライブラリーであったらしい」(木村毅『大衆文学発達史』昭和八年)など、複数の文献で言及されたことから、同時代の文士に特に人気が高かったのは、Seaside Library Series (Munro Co.)および Lovell's Library Series (Lovell Co.)と推定される。そのため、これら両シリーズの作品を中心に、研究対象として調査を進めた。
2. 予てより報告者がご指導ご協力を戴いている欧米の廉価版小説研究の専門家(具体的には、St. Olaf college の Randy Cox 名誉教授、Karen Hoyle 博士、Chief Executive of Voluntary Action Hinckley and Bosworth の Gregory Drozd 氏であり、いずれも英米の廉価版小説および同時代の英米の出版背景について詳しい研究者である)に、欧米で人気の高かった作品についてご教示を仰いだ。そして実際に現地でも調査対象書物のある古書店をご紹介いただき、書肆にご案内もいただいたことで、いくつかの文献を探し出すことが適った。

こうして、本研究の最優先事項となる原書資料の確認のためにも、現地の専門家との連絡を密にしておくことにも努めた。じっさい彼らのご協力を仰げたことにより、現地での資料調査に関しては事前にネット検索では知りえない情報(たとえば資料の損傷状態、複写もしくは接写の可否など)の収集も可能となり、接写カメラの持参などの準備を滞りなく進めて、限られた滞在期間となる現地での時間を最大限有効に活用しえた。

また、資料が長い年月を経たために特に壊れやすく、複写も不可であった場合には、古書も入手したが、こうした廉価版は、もとは廉価であったが今では稀少性から高額になり、一般の古本市場に出まわる確率は極めて低い。だが分野からコレクター間で伝わる情報も多く、*Dime Novel Round-Up* などのコレクター情報誌の確認により、優先的な入手も適った。

最終的に国内の関係資料から整理を始め、日本に輸入され、文士によって構想の原拠と

された可能性の高い作品から順次、英米の図書館に赴いて入手した複写もしくはスキャンおよび購入した古書との比較検証を行った。

その際、先述のように、日本で重視されていた *Seaside Library Series* および *Lovell's Library Series* を中心に分析してみたが、じつは両叢書において同時に活躍した作家は数名のみで、彼らの作品が両叢書に特に多く所収されていたため彼らの作品を中心に作業を進めた。

菊池寛は、その人気作品のいくつかが廉価版洋書の翻案だと伝えられていたため、その作品にも注目した。彼がそうした廉価版小説を涉猟していた様子は「表紙に恋人と接吻していたりなんかするような向うの単行本があるでしょう。そのころ五十銭ぐらいするもの、それをもう片っ端から買ってきては読んでいましたね。」(『座談会大正文学史』岩波書店 昭和三十五年)と弟子の小島政二郎によって回想され、周辺の文士にも、廉価版洋書を読むことを薦めていたとされていた。そのため、表紙や文士同志の人間関係にも注目しつつ作業を重ねた。

最終的に、本研究では廉価版小説から得られた構想が、単に通俗小説という枠では大括りにできない、様々な着想を日本の近代の文学に与えたことの一端を明らかにした。

4. 研究成果

このたびの研究成果については、発表した論文、学会発表、その他についてそれぞれ整理して述べたい。

- (1) 雑誌論文は、連載の翻訳も含め9本発表した。

の『アメリカの廉価小説が生んだ明治のベストセラー』は、明治期における cheap editions がどのようにして日本にもたらされ、同時代文士に受容されたかを、尾崎紅葉や黒岩涙香の作品に照らし合わせ、彼らの翻訳や翻案の経緯を述べたものである。

の『明治の近代化を牽引した二人～福沢諭吉と黒岩涙香』では、従来の研究の中で、共に論じられることのほとんどなかった二人の明治人について、論じた。彼らはそれぞれ、ジャーナリスト、教育家としての側面も有していたことから、それぞれがどのような洋書に傾倒し、どのような思想を以て、明治の日本人を牽引しようとしてきたかを、女子教育を例にとり論じた。

の『日本ミステリーの夜明け』は、近代日本におけるミステリーがどのような変遷をたどって現代の日本の

人気ジャンルに落ち着いたかを示した。江戸時代には、いわゆる小説としてのミステリーの分野が確立していなかったため、中国の影響を受けた裁判ものなどがその代わりとして読まれていたが、そうした時期を経て黒岩涙香が如何に、日本にミステリー(初期は探偵小説と総称)を定着させていったか、その経緯にもふれた。

からは、Charlotte M. Brame の代表作である長編小説 *Dora Thorne* を数年にわたって分載している翻訳である。同作品には Charlotte M. Brame の特徴がすべて凝縮されており、日本にいち早く紹介された作品であることに鑑みると、多くの同時代文士がこの作家の作品に魅了され、次々に自分の作品の原著として求めた背景が浮き彫りになると考えられる。この完訳のあかつきには、その特徴が明らかになると考えられるため、分載の翻訳を積み重ねている段階である。

- (2) 学会の口頭発表やシンポジウム、講演については、以下5の項に記した。

- (3) 以上が、本研究の研究成果として挙げられ、その他には間接的に関わるものとして、共著や、新聞および雑誌の取材協力、書評、シンポジウム傍聴記などがあり、研究の裾野が広げられた旨のみここに述べおきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (*Dora Thorne*)』(翻訳・その14) 東海大学紀要 文学部、査読無、第108輯、2018、pp95 - 100

堀 啓子、アメリカの廉価小説が生んだ明治のベストセラー、書物学、査読無、第11巻、2017、pp24-31

堀 啓子、明治の近代化を牽引した二人～福沢諭吉と黒岩涙香、福澤手帖、査読無、第172号、2017、pp1 - 9

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (*Dora Thorne*)』(翻訳・その13) 東海大学紀要 文学部、査読無、第107輯、2017、pp162 - 157

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ド

ラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その
12)、東海大学紀要 文学部、査読無、
第 106 輯、2017、pp202 210

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ド
ラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その
11)、東海大学紀要 文学部、査読無、
第 105 輯、2016、pp194 - 200

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ド
ラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その
10)、東海大学紀要 文学部、査読無、
第 104 輯、2016、pp144 150

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ド
ラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その
9)、東海大学紀要 文学部、査読無、第
103 輯、2015、pp108 116

堀 啓子、日本ミステリーの夜明け、み
んぱく、査読無、458 号、2015、pp4 5

〔学会発表・講演〕(計 5 件)

堀 啓子、物語の近代、慶應義塾大学文
学部藝文学会シンポジウム、2017 年 12
月 8 日、於・慶應義塾大学(東京都)

堀 啓子、尾崎紅葉と港区、港区講演会、
2017 年 12 月 9 日、於、港区郷土資料館
(東京都)

堀 啓子、アメリカの廉価小説が生んだ
明治のベストセラー、慶應義塾読書会、
2016 年 11 月 13 日、於・糖業会館(東京
都)

堀 啓子、日本ミステリーの黎明、日本
比較文学会第 77 回全国大会シンポジウ
ム、2015 年 6 月 14 日、於・立命館大学
(京都府)

堀 啓子、明治文学の楽しみ：ミステリ
ー揺籃期の三人の慶應人、慶應義塾大学
エルゴ―総会講演、2014 年 6 月 14 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

堀 啓子(HORI, Keiko)

東海大学 文学部 教授

研究者番号：60408052